

# 会報 滝電

(題字は菅田栄治会長)

創刊号  
1980.5

発行 滝電会  
〒565 吹田市山田上  
大阪大学工学部電気系事務室  
06-877-5111

## 会報「滝電」の発刊にあたって

レイデンカイ  
滝電会——この常用漢字に無い文字を用いる会は大阪大学(工学部)電気系学科に縁故のある教職員と卒業生等で組織された同窓会名である。滝は河海の中にあって舟の通行する道筋を表わす文字で大和言葉では「みお」にあたる。この筋を示すために水中に打った杭(くい)が滝標であるが大和言葉では「みおつくし」という。滝の串の意味。みおつくしは大阪市のマーク(木)となっている。大阪をシンボライズするために採用された名前とすれば一応の説明になるがもうひとつ意味がある。それは蓄電器のライデン瓶(Leyden jar)の語呂からきている。この蓄電器は電気現象が物理学者などによって実験的に研究され始めた頃の1746年にオランダのライデン大学にてムスケンブレク教授(Peter van Musschenbroek)によって発明されたものである。彼は医学を修めた後に実験物理の研究を始めており1717年には渡英してニュートンと相識りあい、物理や数学、さらには哲学教授職をもこなすという多才の人であった。これを思うと創造的英才を輩出させるという大学同窓会にはうってつけの名前であろう。

滝電会の立派な名簿が山口前会長時代に刊行されて会員は非常な便益を得ていると思う。これを見ると明治44年に第1回の先輩31名が卒業されそのうち4人が生存されてい

会長 菅田栄治

(電気・昭4, 7)



る。すると明治41年が電気科創設の年となるがそれは1908年にあたり今年は第72周年ということになる。因に東京大学の設立は1877(明治10)年である。

1905(明治38)年にはわが国は世界に先んじて無線電信を戦争に実用し「敵艦見ゆ」の信号で日本海々戦を勝利に導いたことはあまりにも有名。それから3年経った時に滝電会の芽が出て今日の大樹に育った。電気に関する科学と技術は人間活動のあらゆる分野に深く渗透してこれを推進してゆく基幹となるものである。名簿によって卒業生数の統計を作つて見ると表のようになつた。昭和25年以降という欄を作つたのは第1の人生をハリキッテおられる人々の人数は?と思ったから。現在、高専以上の電気系学卒者は年28,000人といわれる。その中に滝電会々員も活躍していることを思うと心はずむ。

(阪大名誉教授・大阪電気通信大学学長)

学 科	課程	大 学			大学院修士(前期)			大学院博士(後期)		
		電 气	通 信	電 子	電 气	通 信	電 子	電 气	通 信	電 子
卒業期	明 治	56								
	大 正	342								
昭 和	24年まで	584	174							
	25年以降	1,183	1,213	682	351	322	267	33	86	55
	計	1,767	1,387	682	351	322	267	33	86	55
総	計	2,165	1,387	682	351	322	267	33	86	55

## 昭和55年度滝電会総会・懇親会御案内

日 時 6月6日(金)午後6時~9時  
場 所 大阪天満橋 大阪マーチャンダイズ  
マートビル20階 東天紅  
電話 06-943-3781  
総 会 午後6時~7時  
会長挨拶  
事業報告その他

スピーチ

「超電導エネルギー貯蔵について」  
大阪大学工学部 西村正太郎先生

懇親会 午後7時~9時

会 費 5,000円  
準備の都合上、出欠のご返事を同封のはがきにて  
来る5月27日(火)までにお知らせ下さい。

# 澁電会小史



前会長

## 山口次郎（電気・大15、昭7）

昭和50年4月に改正された澁電会会則によると、正会員の中に（官立）大阪高等工業学校電気科の卒業生が含まれている。そこで澁電会発足当時のことを古い大先輩に、電話や手紙でお尋ねした。返事を頂いた方は20パーセント位であったが、第1回の卒業が明治44年であるから、連絡を申したのは85～90才の方々で、返信率の低いのもいたし方がないと思う。

御返事の内容を最大公約数的に集約すると、(1)澁電会の結成されたのは、明治45年～大正2年頃らしい。(2)澁電会の滝は、大阪市の市標の「みおつくし」で当時は「滝」であって、「澪」でなかった。（私は正式には「澪」であるときいていた。）(3)、名付け親は、当時の電気科長木村廉助先生のことである。木村先生は東大の卒業で約10年間科長をされ、その後大竹、本野、七里先生につながれている。先生は誠実、篤学のお方で、生徒に大変尊敬された。

澁電会に直接の関係はないが、大阪高等工業学校の前身は明治29年5月に設置された（官立）大阪工業学校で、私が入学した大正12年4月の大阪高等工業学校の入学宣誓式か何かの祝日に、「朕……大阪工業学校設立……、睦仁」の詔書に、私等生徒が10名位宛整列の上忝しく敬

礼した。側には校長が確か仁丹姿の礼服で立っておられた。睦仁という名は明治天皇の御名で、この署名は御真筆と記憶している。

私が学生であった大正12～15年および昭和4～7年頃の澁電会の活動で記憶に残るものは、卒業時に優秀な生徒に澁電会賞が贈られたこと、澁電学生会と共に新入生の歓迎会や卒業生の送別会が行われたことである。一方澁電学生会では学生の出し合った会費を、図書部やテニス、野球、ボート、角力、柔剣道、ラグビー部等の運動の各部に配分して、勉学やスポーツ（対学年と対科試合）を奨励した。

今から約10年前の昭和45年頃、眠れる澁電会を目覚まさうという機運が阪大工学部電気関係教室に起り、それまで、はっきりしていなかった規約や名簿を整備し、昭和50年に会則を制定し、昭和53年に名簿を約4,000名の全会員にお届けした。これに到るまでの会員各位の御援助はもとより、電気関係の先生方の御尽力に深く感謝する次第である。

次に先輩各位よりの来信を順序不同で以下に転記させてもらいます。これによって澁電会の古い姿が眼前に浮ぶようです。 （阪大名誉教授・摂南大学学長）

## 小川信一（電気・大5）

(1)、当時、学校は堂島玉江橋南詰にあり、大阪高等医学校（堂島大橋南詰）と並んでおり、あらゆる事で対抗意識がありました。

(2)、学校の学科は機械、採鉱冶金、醸造、造船、舶用機関と電気科の大学科でした。

(3)、専門の先生は、木村廉助科長、矢幡、平沢、佐々木、木村（庄）の5人で、生徒の数は20数名（学年）でした。

(4)、学校の創立記念日には毎年学芸会があり、電磁現

象の模型などを展示し、一般に公開しました。

(5)、毎年の年末には忘年会があり、1、2、3年全部揃って市内で「スキヤキ」を囲み「カクシ芸披露」をしました。

(6)、高等医学校との対抗競技として次の二種がありました。

(イ)、学生相撲大会が、毎年浜寺公園で行なわれました。  
(ロ)、同上の趣旨で綱引大会が、豊中グラウンドで行なわれました。

## 西羅邦一郎（電気・大2）

(1)、澁電会は今は亡き高原丈夫君の発想だったと記憶しています。

(2)、澁電会の命名の由来は、大阪に存在する電気科の学校ということで、大阪市のマーク（不：みをつくし）から澁電会と命名されました。

発足は大正2年かと思います。と申しますのは、私も大正2年5月に卒業致しました折、各人が澁電会の意匠を入れたネクタイピンを作り各自が持、別れを致しました。



**黒嘉一郎**（電気・大2）



一般に、団体名には少なくとも二つの要素——1つはどんな団体かということ、もう一つはどこに在る団体か——いうことが必要であります。

われらの団体としては、前者は電気関係ということから「電」を以て簡単に片付きますが、後者はそんなに簡単にまいりません。難問であって議論百出。しかし結局は「澪」に落ち着きました。

澪（みを）は辞書によると、「河海中で船の通行する底深い水路」とあります。そして、その水路標識つまり澪標（みをつくし）は、大阪の港ではカットのような杭が立てられていました。今はあるか、どうか知りませんが（今は多分ないでしょう）、私は若い頃に実物を見知っています。このような澪標は大阪独特のものであったのでしょうか、転じて大阪のシンボルになっていることは周知であります。

以上が「澪電会」と命名した由来であります。

その上、「レイデン」というと「レイデンびん」の「レイデン」に通じるから、電気に縁があって大いに宜しいということになり、全員賛成（？）で決ったように思います。

#### 菅田会長がご進講

天皇陛下が学者からお話を聞かれる新春恒例の皇室行事「講書始の儀」が1月8日午前10時半から皇室宮殿「松の間」で行なわれた。

人文科学部門一名、自然科学部門二名の方がご進講されたが、自然科学部門では、本会の菅田会長が「日本の電子・イオンビーム応用技術」について、20分間ご進講された。

腰を痛められている皇后さまはご欠席されたが、皇太子ご夫妻と秩父宮妃殿下、三笠宮容子さま、および皇室参与になったばかりの森永貞一郎氏ら32人が共に傍聴された。

## 日本の将来と独創性

基礎工学部教授  
日本学術会議会員

**桜井良文**（電気・昭18）



私が大学を卒業してからもう37年になるが、その間私共をとりまく環境は大きく変化し、卒業当時は自分の身のまわりか、せいぜい日本の将来について考える位だったのが、今や地球号の将来について考えなければならぬよう世界上が狭くなってしまった。その間、第2次世界大戦という大きな変動があって、本当にどん底の状態を経験したが、資源、エネルギーともに不利なわが国を最近のような隆盛に変身させたのは科学技術における努力、とくに工学技術者の増強のたまものである。しかし最近になってエネルギー、資源、環境の諸問題が苛酷になるにつれて、若者の中に工学志望から社会科学や医学志望へとうつっていく世相があらわれていることは甚だ残念であり、日本の将来に不安を感じるのは私だけではあるまい。

日本は今後とも科学技術とくに知識集約型の産業を基幹として行かねばならないが、すでに工業大国になってしまっているわが国としては、いままでの欧米追随型から自己開発型へと転進しなければならない。

私の関係している日本学術会議の科学振興基本問題特別委員会でも独創性開発を最優先の問題としてとりあげているが、そこでのアピールの要点だけを記してみる。

(1)日本人の性格が日本の風土と歴史により人間間の交換力（集団指向）を重視するようになっている為、抜き出した者の足をひっぱる傾向がある。

(2)科学と技術が明治初期は別々に輸入されたため両者間のギャップが埋められず、「開発」に対する重要性の認識が不足である。

(3)天才や優れた研究に対する評価が充分できない、いいかえれば良い研究管理者がいない、などの原因があり、これの対策として(i)教育制度に飛越し進級を認め、優れた人を20才位で研究者に育てる、(ii)研究機関をふやし（日本は他の先進国にくらべ国の予算が少い）、国際的交流を効率的にする、(iii)研究成果に対する評価に力を入れ、成果の活用策をはかるなどである。

これらの問題の解決こそ80年代における使命であり、皆様の御協力を願いしたい。

# 大阪大学工学部の国際交流の近況

電気工学科教授

犬石嘉雄（電気・昭19）



求められるままに、阪大工学部電気系教室の立場から眺めた最近の国際交流について述べるが、極めて限られた紙数のため断片的、独断的な記述になることを御容赦願いたい。

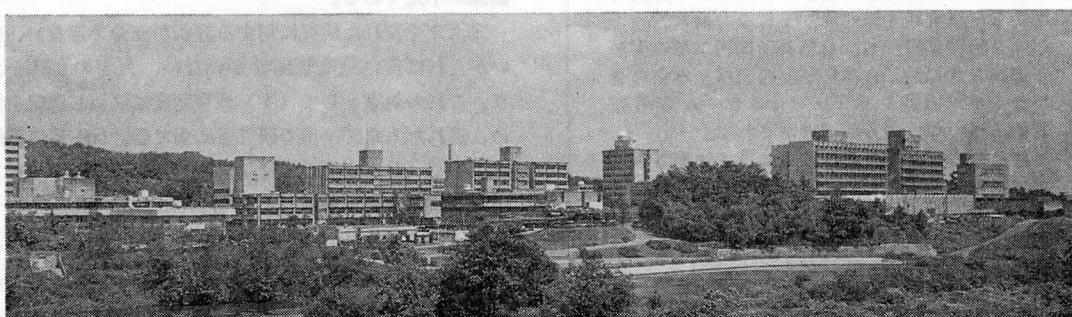
近年、我国の経済的地位の向上と科学技術水準の高度化によって我国と外国の大学間で真の意味での相互ベースでの交流が盛んになりつつある。しかし、日本語の特殊性と地理的ハンディキャップのため、各地域での急激な経済進出にくらべて、文化的・学術的な国際交流が遅れ、それがイメージ形成上マイナスとなり、外交経済の上でも大きな損失を被りつつあることは否めない。80年代は大学でも先進国、途上国両方に相手にしてそれぞれきめの細かい充実した交流を行い、相手国の人間の心を掴むことが国家百年の大計に通じると考えている。

さて、昨年度阪大教官の海外渡航者数は601名（内工学部148名）、外国大学からの研究者等の来訪、滞在者数は404名（内工学部57名）である。このことから判るように工学部や電気系教室でも當時数名の外国人スタッフ（主として先進国）が滞在して、研究や教育に従事している。さて、工学部の教官が外国へ留学・研修するための費用の出所で海外出張を分類すると、文部省在外研究員（長期1年、短期3か月、毎年工学部で各数名）と学術振興会（J. S. P. S.）の国際研究集会出席補助（毎年5～6名位）が主である。これだけではとうてい今日の国際交流の盛んな需要を満たすには程遠く、多くの若手教官・学

生たちが相手国の費用で留学しているが、最近大阪大学工業会や山田財団などが援助を始められたのはまことに時宜を得ている。

以上、主として先進国相手の交流を述べたが、東南アジアを中心とする発展途上国からは、たとえば学部段階では国費（文部省）、私費留学生合わせて36名（54年度）が工学部に留学しており、在学生の3%近く、東大、京大に次いでいる。豊中地区には立派なバス付個室の国際交流会館（60室）が最近建設された。さらに、醸酵教室を主体として微生物工学国際交流センターが工学部に設置され、東南アジアとの国際交流の拠点校として多数の研修生の受け入れや教官の派遣を行っている。特にタイ国立チュラロンコン大学工学部と大阪大学工学部は協力関係にあり、53・54年度中に5名（内2名電気系）の工学部各系の教授が訪タイし、先方からも学生、教官が来学している。筆者もチュラロンコン大学に1か月半滞在したが、同国の大学の上層部は英米留学派が多く日本留学派が認められなかった中で、電気工学科のPanyakeow博士（阪大電気博士卒）が孤軍奮闘し、その人望で5人の日本留学生が採用されているのには意を強くした。

さて、最近中国との交流がにわかに脚光をあびている。多数の志願者中から100名を選んで吉林の卦日留学生予備校で、日本人教官から理数英等の基礎科目を学ばせ本年4月より中国政府の負担で学部へ留学する（内阪大4～6名）。この他既に中国から研究生（大学院学生）2名、進修生（独立研究者）6名程度を阪大で受け入れている。中国政府留学生の場合給与が月3万円と安く、修業年限が1年少なく基礎学力に不安があるが、華僑の援助と持ち前のファイトで切り抜けて行くと期待される。いずれにしても途上国からの留学生に対してはきめ細かい配慮と日本の社会に親しませることが肝要で、戦前の反日派養成の轍をふむべきではない。この他阪大電気系の教授が主催した国際集会も54年度は3つ以上にのぼっている。〔超電導エネルギー蓄積（西村）、レーザ核融合（山中）、絶縁日米セミナー（犬石）〕このように、母校も国際化時代に対処して人間、学問の交流に努力しつつあり、同窓生諸君の御理解と御協力を心からお願いしたい。



## マイクロプロセッサ講習会に 参加されませんか

電子工学科教授

寺田 浩 詔 (通信(院)・昭33)



近ごろ世の中を騒がせているもののひとつに、マイクロプロセッサないしマイクロコンピュータがあります。会員諸兄の中には、すでにこの素子の研究、製造あるいは応用に携っておられる方も多数おられ、それぞれ指導的な立場で活躍されておられます。

大学からこの素子を眺めておりますと、色々な感概を覚えます。ごく初期の計算機は、大学・研究所で設計、さらには製作されたものが多く、これらが今日の情報処理技術の基礎を作ったと言ってよいでしょう。しかし、ハードウェアの巨大化・複雑化について、計算機システムの実験的研究は大学の手を離れ、産業界を中心として、非常な発展をとげました。今日の情報処理技術の隆盛はその間の進歩をよく示しています。しかし、一方ではソフトウェアの問題が深刻化し、種々の技法上の改良が試みられると同時に、現在の計算機の原理、つまりノイマン機械そのものを見直す動きが目立つようになっています。

マイクロプロセッサが手軽に利用できるようになって以来ふたたび、計算機システムを、もちろん原理的な確認に止まりますが、大学でも実験的に追求できるようになりました。今日ほど各大学で、マルチマイクロプロセッサ方式を主流とした、情報処理システムが研究されている時期はかつてなかったと思います。

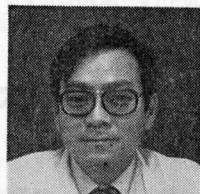
このような環境で教育され、研究に従事した新しい卒業生が、産業界で活躍する頃には、新しい非ノイマン形機械が実用の主流になるのではないかと、大きな夢を託しています。情報処理技術の発展を大きな流れのなかで見ると、やはり一種の輪廻が作用しているように感じるこのごろです。

電気系三教室でも、この新しい機能素子の普及を図るために、一昨年から工学部公開講座としてマイクロコンピュータ応用に関する講習会を毎年1回開催して来ました。今年も7月22、23、24、29、30日にわたくちで開催予定です。会員諸兄の御参加をお待ちしております。

## 若い力に期待する！

東京芝浦電気株  
第二集積回路技術部長

島 亨 (電気・昭36)



L S I の開発に従事している。

半導体産業は若い産業であり、変化の多い世の中でも、半導体の技術革新はさらに激しい。

不惑の壁を目の前にして以来、一層惑いつつも、若い技術者とともに、この若い産業を支えたいと年毎に1つずつ若がえることにして今30代を謳歌している。

L S I には夢がある。

マイクロコンピュータの出現によって、産業機器はもとより、民生機器への応用も広がり、家庭へもマイコンが入りはじめている。また電卓をみても、演算機能だけでなく、時計付、プリンタ付、メロディ付から電子翻訳機、音声出力など、一つずつ夢が実現され、また次の夢を呼んでいく。絶えず夢をもち、夢を追いかけて行くのが半導体事業とも言えそうである。

それにつけても半導体事業という商売は金のかかるものである。量産効果が上げやすいとも言えるが、同時に景気の変動に敏感である。また主要なプロセスだけでも1ライン10億円とも20億円とも言われている。電子ビーム露光装置、超高精度マスク合せ装置、高出力イオンインプランタ、超高速テスター等いずれをとっても1台数億円という代物である。しかもこれら設備も次々と開発される新鋭設備に置換され陳腐化も早い。

L S I の開発は時間との勝負である。いかに早く新しい製品を開発し世に送り出すか。数年前の3~5倍になろうとする新鋭設備を生かし、早く償却するためにも、時間への攻めである。

時間に追いかけられながら、夢を追いかけ実現する。これが半導体産業である。

昨今新聞紙上を賑わしている日米半導体問題にしても、確かにコスト・パフォーマンスを重視する半導体分野の量産面では日米隔差は縮まり、ある分野では凌駕しへじめているといって過言でない。しかしこと開発・研究の分野ではまだまだわれわれの為さねばならぬことは多い。若い技術者に期待するところはそこである。

半導体産業は若い力を必要としている。

資源は有限だが、能力開発は無限である。若い芽は早く、力強く伸びる。能力開発は年率20%向上も軽いバーである。100人の力は、1年で120人にもなる。

と人にも我にも言い聞かせつつ、技術立国を目指して80年代へ躍動したい。

## 我が祖国の大学に赴任して

韓国・漢陽大学副教授

姜衡富（電気・昭37）



2月中旬までの氷点下10度を越す猛烈な寒波も過ぎ、春のけはいが感じられるこのごろ、こちらでは大学の卒業式のまつ盛りだ。私が勤務している漢陽大学では2月23日に卒業式があった。当校では野外劇場で式が挙行されたが、卒業生約1500人の他にその父兄、親類、友人、恋人達も参加し総勢10000人を越える人達が集まり、あたかも何かのお祭りのような感じだった。出店の花束は飛ぶように売れ、一家総出で記念写真をとる光景があちこちで見られ、その教育熱のほどを知った。また、こちらでは息子を一人大学に出すことがその家にとってどれほど大変な仕事であるかということも知った。

私は昨年4月当大学電気工学科へ副教授として赴任した。日本で生まれ、日本で教育を受けてきた私にとっては、自分の祖国でありながら大きなためらいがあった。というのは、私自身韓国語がほとんど解せず、また韓国の事柄を全く知らないために、果して勤まるかどうか不安であったからだ。しかし自分の国で仕事をすることを願っていた私としては、心を決めて妻子共々こちらへ来た次第である。来た当初はやはり言葉のために悪戦苦闘したが、今ようやく慣れて来た所だ。ところでこちらの大学は日本のように講座制ではなく、講師、助教授、副教授、教授のいわゆる教官達は独自に研究室を持てる制度になっている。しかし日本のような講座費に相当する経常的な研究費はなく、各自が文教部、科技庁、その科学財団に研究費を申請し採択されなければ研究費は一銭もなしという非常にきびしい状況です。私が専攻してきたレーザー、プラズマの研究は従来社会的優先順位が低く、研究者も非常に少いが石油危機以来かなり関心が高まり、特にプラズマ・核融合研究は日々具体的にスタートする機運が高まって来た。私もそれに参画することになっている。濛電会の今後の発展を祈りつつ筆をおく。

## 長崎総合科学大学について



長崎総合科学大学教授

橘 啓八郎（電子・昭37）

私が勤務しているのは2年前まで長崎造船大学と呼ばれていた小規模の単科大学（大学院2専攻、学部5学科、学生数約2000名）である。

キャンパスは市内をはずれた文教居住地区で雲仙嶽を遠望する橘湾のほとりにあり、自然環境は素晴らしい。小じんまりした本学は都会のマンモス大学とは一味ちがった良い影響を学生達に与えているようであり、さらに学生数に対する専任教員数の多さと相まって、個人指導型のスキンシップの濃い教育を施している。

さて私が責任者である電算機センターについては、西の果ての本学においても最近の社会情勢を反映してか、必修でないにもかかわらず電算機関連科目の受講生が激増した。このため53、54年度にわたり新しいシステムを導入した。機種はH P 3000シリーズⅢである。バッチ処理用の周辺装置の他に会話型端末装置を10数台持つ小型のシステムではあるが、計算機教育の一環として使用料など不要で学生達に開放されている。このため授業に関連する実習以外にも終日学生達に自由に利用されているのが特徴であろう。

また最近では中国の見学者をしばしば迎えるようになり、中国での計算機利用に対する関心の高さを反映してか専門でない人からも計算機教育などについて熱心な質問を受けることが多い。

これは本学の特質の一つとしての国際交流を重視していることに関連している。すなわち従来より造船技術関係で東南アジアなどの留学生が多く54年には我が国初のケースである中国ハルビン船舶工程学院と姉妹校提携を行い、中国の研修生10名を受け入れなどの活動をしている。今後とも諸外国の大学と学生、教授陣の相互派遣などの交流を活発に行う予定である。

以上簡単ながら本学の紹介をさせていただいた。本学には阪大電気系出身者として、電気工学科に金教授（通信・昭29）、電算機センターに川端講師（電子（院）・昭48）が教育・研究に活躍されていることを付言する。

## CAD 技術內外比較

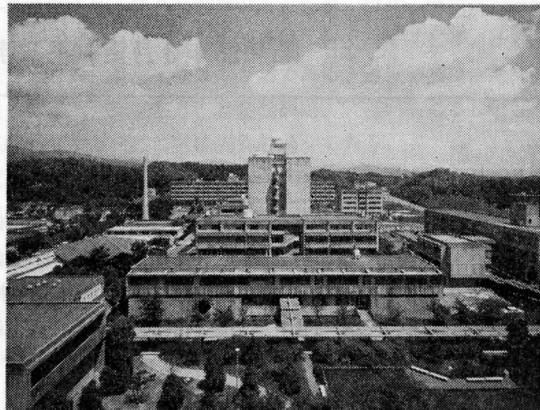
熊谷千尋文藝腰川、(腰川腰川)選出  
中、(高野千尋)認同等中、(立日)  
(香櫞原)人體問題、(駒井田木)題  
シヤープ株  
CADセンター所長  
**西岡 郁夫** (通信一四四二)



1960年代の終り頃から我国に取り入れられたCAD(Computer Aided Design)技術は、特にLSIのパターン設計の省力化に必須のものとされ1970年代に電子黒板的システムが数多く輸入された。一方、通研と電算6社が中心となって国産のCAD技術が開発され、プリント基板(以下PWB)やLSI用のCADシステムが主としてin houseで実用されている。筆者はこの7年間PWB用CADの開発に従事してきたので、この分野での内外技術比較を試みる。

米国産のPWB設計用市販システムの特徴はLSI用電子黒板の延長線上に位置付けられている点にある。このため自動設計能力よりも電子黒板の能力に重点を置いている。PWBの場合には自動設計手法が大いに有効なものであるだけに疑問を投げかけたい。次にLSI、PWB、三次元と何でも出来る汎用システムが多いが、全アプリケーションに共通のデータ・ベースを用いているのが目をひく。個々のアプリケーションにはそれぞれ最適のデータ構造があり、我々は最適データ構造の設計に多くの時間を費しているのと対象的である。共通のデータ・ベースはシステムハウスに有利だがユーザーにメリットは少ないと思われるのだが、又、設計システムは後に続く製造工程を無視しては考えられない。この点でLSIとPWBでは日米事情に大きな差があることに注目すべきである。すなわちPWB製造に於いては日本の技術が格段に優れており（IBMなどは例外）、米国の平均的な製造ラインに合わせて作ったCADシステムでは日本の優れた製造ラインに適用し切れないのは当然ではないだろうか。

CAD技術開発は日本人に適したテーマである。80年代には国産のCADソフトウェアが米国に輸出され、70年代の借りを返すことも夢ではない。若い人達の後継者を期待する。



工学部建設系建物より電気系建物を望む

## 会報発行について

幹事 裹 克己（通信・昭28）

昨年6月1日の総会で、昭和54年度事業計画として事務機構の整備と、会報の発行が決りました。前者について個々の会員の住所と勤務先の変更、会費の納入状況を把握するための原簿を作成することになりました。実際の作業は電気系事務官主任の佐藤氏と後任の和田氏の全面協力を得て、このほど完成しました。原簿の訂正、記入も引き続き和田氏の協力が得られます。これで各会員の異動が正確に処理できると期待しています。このためにも、異動があれば洩れなくお知らせ下さるよう会員各位にとくにお願いします。

会報発行はしばらくの間は年一回を考えています。編集事務は副幹事の黒田英三（電気・昭37）、真田英彦（通信・昭37）および白川功（電子・昭38）の諸氏にお願いしています。

会報は申すまでもなく、会員相互の意志の疎通を目的とするものでありますので、会員各位からの寄書、企画の提案その他をどしどしお寄せ下さるようお願いします。なお今回の会報では、母校の状況をお伝えすることに多くのページ数が割かれています。これは同窓会活動の核は母校であるという考え方の一つの表現ですが学外での卒業生の活躍ぶりも今後お伝えして行きたいと考えています。これにつきましても会員各位の御協力を是非お願い申し上げます。

## 講座紹介

### 電気工学第2講座

(電気機器・自動制御)



教授

西村正太郎

本講座は昭和9年に設置され、幾多の変遷があったが、現在、講座内容は電気機器および自動制御、スタッフは西村正太郎教授、村上吉繁助教授、辻毅一郎助手、奥田弘幸技官と森鈴代事務補佐員の5名である。電気機器は、電気工学の創成期から発展してきた分野であり、自動制御は、戦後いちじるしい発達をとげ、諸工学の基礎となっていることは周知の通りである。

講座の最近の研究課題は、伝統的な電気機械からサイリスタを中心とする半導体、それに超電導の応用などによる新しいエネルギー機器の開発とその制御、レーザーによる計測、大規模なシステムの解析や設計など、広い範囲にわたっている。こうした課題の研究、開発には、多様で複雑な対象を物理学的に適確にとらえ、効率よく工学的に総合する能力が必要である。物理学のゼネラリストであるとともにシステムエンジニアでもあること、このような考え方が、本講座の教育・研究指導の底流にあるといえようか。以下、主な研究課題を簡単に紹介する。

超電導エネルギー貯蔵：超電導コイルの永久電流によるエネルギーの貯蔵・放出の際の動特性の研究とその最適制御。これは新しく発足した本学部附置の超電導工学実験センターにおけるプロジェクト研究にも予定されているテーマで、本講座の協力が期待されている。

サイリスタ素子および回路の計算機援用設計（C A D）：開発したプログラムは、すでに実用されているが、さらに超電導エネルギー貯蔵に関連して、低温領域における素子特性の研究にも拡張している。

レーザーレーダによる大気観測と大気汚染の予測：大気状況のパターン認識を中心としたデータ処理システムの開発と、汚染予測への応用を目的として観測を継続している。

大規模システムの解析と設計：システムの設計や管理運営に対するマルコフ決定過程の応用、大規模システムの例として、電力系統のモデルの低次元化との動態安定度の研究などを行なっている。辻助手はこの分野の研究のため、現在、ウィーン郊外にある国際応用システム解析研究所（IIASA）に留学中。

## 教室情報

### ■昭和55年三教室主任教授

昭和55年度の電気系三教室の学科主任（専攻幹事）は、下記の通り決定された。

電 气 鈴木 勝教授

通 信 手塚慶一教授

電 子 児玉慎三教授

### ■電気系三教室人事（昭和54年度）

事務室主任 佐藤 淳郎 工学部經理掛へ  
配置換（10.20）

同 上 和田 栄史 事務局主計課より  
配置換（10.20）

電 气 善波 正夫 助教授に昇任（12. 1）  
電子ビーム 尾浦憲治郎 助教授に昇任（3. 16）

同 上 藤岡 弘 助教授に昇任（3. 16）  
電 气 善波 正夫 松江高専教授に転任（4. 1）

## 講座紹介

### 通信工学第3講座

(無線工学)



教授

滑川 敏彦

本講座は昭和15年わが国の国立大学に初めて設置された通信工学科の創設以来の伝統を持っている。

創設以来、青柳健次教授（現名誉教授）の指導のもとに発展し、戦中戦後の変遷のなかで、無線通信工学、超音波応用、雑音理論、医用電子工学などの各分野において、いちじるしい研究、教育の成果があげられた。この当時の宮脇助教授（のち電子工学科教授を経て退官）の活躍はめざましいものでした。

昭和43年には滑川敏彦教授が講座担当となり、途中の人事異動は略することとして、現在の第3講座の陣容はつぎのようになっています。

教授 滑川 敏彦（工学博士）

助教授 笠原 正雄（〃）

講師 森永 規彦（〃）

助手 村田 正（〃）

助手 佐藤 正志（〃）

事務補佐員 道中 章子

現在は、情報理論、通信方式、電子回路などの分野において、ハードからソフトまでの広い範囲にわたって、教育研究活動を行っている。とくに宇宙通信、光通信、集積回路の応用システム回路、また高能率符号伝送方式ならびに符号化理論などの新しい分野において国内外にその研究成果が知られている。

研究室には教職員の他に大学院生、4年生に加えて、国内、海外からの研究生などをまじえ、30名以上の研究員が日夜各自のテーマに取組んでいます。

よく学び、よく遊ぶということですが、「なめ研スキー」は名物で、毎年正月はじめに若い女性30名を誘い60名での信州スキー旅行（5日間）は今年で15回目を迎えています。そのなめ研スキーで結ばれ、結婚ゴールインになった卒業生も多数ありました。

### ■電気系三教室への海外からの留学生

最近国際交流が盛んになっているが、三教室においても、當時数名の留学生が在籍している。今年度は、以下の7名が阪大生として勉学に励んでいる。

電気 学部1年 李 伊甸君（マレーシア）  
博士2年 M. N. マカール君（エジプト）  
通信 博士3年 マゼン・ダハブレ君（ヨルダン）  
同 趙 成俊君（韓国）  
電子 学部1年 C. T. ヤップ君（マレーシア）  
2年 R. チューンワタナ君（タイ）  
修士1年 高下マイケル弘人君（米国）

また、折からの日中交流の一環として、今春中国から下記の4氏が来学し、今後約2カ年研究生として研究に従事することになっている。

電気 木下研 李 勲氏（華中工学院）  
通信 滑川研 件 克謙氏（西北電訊工程学院）  
通信 中西研 梁 新来氏（西北電訊工程学院）  
電子 寺田研 高 小康氏（北京市自動化技術研究所）

## 講座紹介

### 電子工学第6講座

(演算電子工学)



教授

尾崎 弘

本講座は、昭和33年工学部に電子工学科（6講座）が創設された際、その第6講座として、計算機科学全般にわたる教育と研究を司るものとして誕生した。現在の陣容は、開設以来担当の尾崎弘教授の他、白川功助教授、藤原秀雄・河田亨・築山修治各助手、榎木美恵子事務補佐員、大学院後期課程1名、前期課程9名である。最近重点的に進めている研究課題は以下のようである。

計算機援用設計：電子機器システムの実装設計において、コスト低減・信頼性向上・設計時間の短縮が最も重要な課題である。本講座では、この分野での諸問題に対して種々の技法を開発し、多層プリント基板、ハイブリッドIC、MOSLSIチップに対するいくつかの自動レイアウトシステムを作成し、实用に供している。

組合せ問題における計算複雑度解析：組合せ問題に対するアルゴリズムの効率の評価、問題自身が潜在的に持っている難かしさの評価、特定の問題に対して従来のものよりも効率の良いアルゴリズムの開発は計算複雑度解析と呼ばれるが、本講座では、この分野においてもいくつかの有用な成果を達成している。

計算機論理設計：計算機システムの信頼性向上のための論理設計技法、故障診断技法、ならびに論理回路の検査複雑度の解析、等に関する研究を行い、この分野においても多くの成果を得ている。

計算機ソフトウェア：ソフトウェア生産の能率化のための実用的ツールの開発を目指し、プログラム検索システムの設計、及びマイクロコンピュータ用COBOL (JIS水準2) コンパイラの開発を行なっている。

回路網構成理論：一般的な回路網の数理モデルである多変数正実関数は昭和35年本研究室で初めて提案され、この20年間世界の多数の研究者の注目をあびた。さらに昭和49年には、回路網を「素子を接続したもの」と形式的に定義し、同次形正実関数をはじめ新しい多変数正実関数を導入した。これらは高く評価され、電子通信学会から論文賞並びに業績賞を受けた。

### ■学生見学旅行

電気系三学科では、例年春休みに3年次学生（4月に4年に進級する学生）の工場見学旅行を行なっている。今年は、各学科ごとに下記の通りの日程で見学を行なった。

#### 電気工学科

- 3月24日 東芝・府中工場  
25日 日立・日立工場  
26日 日立・日立研究所、国分工場  
引率教官 鈴木胖教授、村上吉繁助教授  
参加学生 27名

#### 通信工学科

- 4月7日 電々公社・横須賀通研  
8日 日本電気・玉川工場、富士通・川崎工場、  
富士通研究所  
9日 日立・戸塚工場、ソフトウェア工場  
10日 東芝・小向工場、総合研究所  
引率教官 真田英彦助教授、中西暉助手  
参加学生 36名

#### 電子工学科

- 3月24日 トヨタ自工、日本電装・安城製作所  
25日 電々公社・横須賀通研  
26日 日本電気・府中工場  
引率教官 児玉慎三教授、前田肇助教授、  
楠岡英雄助手  
参加学生 38名

## 学界動向

### 電子通信学会役員など改選

電子通信学会の役員・幹事および評議員の改選がこのたび行われましたが、本会から以下の方々が新たに当選されました。

副会長（地方）小山次郎君（電子工学科教授）  
評議員（地方）藤澤俊男君（基礎工・情報工学科教

授、通信・昭27）

なお、本年度は以下の方々が留任されております。  
編集幹事 池田博昌君（電々公社・武蔵野通研・基  
幹交換研究部統括調査役、通信・昭34）  
評議員（在京）川島将男君（富士通研究所取締役、  
通信・昭27）

### 母校の教壇に立つ本会々員

現在電気系三教室では、専任教官のほかに、学外の産業界、学界で活躍中の卒業生の多くが非常勤で後輩の指導にあたっている。現在三教室において非常勤の講師の任についている会員の紹介をしよう。

#### 電気工学科（専攻）

「特別講義」 住友電気工業㈱副社長 東野俊一君（電気・昭15）  
「特別講義」 阪神電気鉄道㈱車両部長 広井均一君（電気・昭28）

「電気機械設計製図」 三菱電機㈱直流機製造部担当部長 河村寿三君（電気・昭29）

「高電圧工学」 大阪工業大学教授 岡 重信君（電気・昭24）

「発電工学」 関西電力㈱原子力室調査役 後藤業明君（電気・昭28）

「照明工学」 神戸大学工学部教授 坊 博君（電気・昭20）

#### 通信工学科（専攻）

「音響工学」 関西大学教授 西山静男君（電気・昭16後）  
「特別講義」 近畿日本鉄道㈱監査役 中井 実君（電気・昭17）

## 電子工学科

### 学 部

「特別講義」 三菱電機㈱主任研究員、田中千代治君（通信・昭36）

「計算機ソフトウェア」 阪大基礎工学部教授 都倉信樹君（電子・昭38）

### 大 学 院

「オートマトン理論」 広島大学総合科学部教授 樹下行三君（通信・昭34）

「グラフ理論」 広島大学工学部教授 翁長健治君（通信(院)・昭34）

「特別講義 I」 電々公社横須賀通研データ処理方式 研室長、橋本昭洋君（通信・昭36）

## 電磁エネルギー工学専攻

大阪大学では学際領域に属する新エネルギー開発の研究教育はレーザー核融合研究センター、超高温理工学研究施設および電気工学科、原子力工学科等の講座で、それぞれの特徴を生かし独自に行なわれていましたが、将来のエネルギー需要に対する社会的要請に答えるため、またエネルギー問題の解決という緊急な要請に適切に対応するため昭和54年度にこれまでの研究教育体制を統合し、新設部門を加え、工学研究科に電磁エネルギー専攻が設置されました。

この専攻は基幹講座と協力講座よりなり、新エネルギー源の開発、エネルギー交換・輸送法の確立、さらにシステムの機能問題等、総合的工学としての電磁エネルギー工学を学問体系として整備し、併せてこの分野の研究者・技術者を養成することを目的としています。

基幹講座はレーザー工学講座、超高温工学講座と要求中の電磁エネルギー変換工学講座の3講座です。協力講座はレーザー核融合研究センター、超高温理工学研究施設、電気工学、原子力工学よりの5講座です。

昭和56年3月には第1回の大学院前期課程（修士）修了者を出すことになっておりますのでよろしくお願ひ致します。

溝電会の諸兄におかれましても、電気3教室同様御支援御鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

電磁エネルギー工学専攻教授

中山龍彦（電気・昭38）記

## 超電導エネルギー貯蔵 国際シンポジウムを振り返って

昨年の10月8日から10日の3日間にわたり超電導エネルギー貯蔵国際シンポジウムを関西セミナーハウスで持つことができた。代表西村正太郎教授、国際組織委員長増田正美教授（高エネルギー物理学研究所）のもとにその2年前から準備を進めて来た手作りのシンポジウムであったが、海外より16名、国内より60名のこの分野の第一線の研究者の出席を得て極めて熱のこもった報告と討論が行なわれた。

超電導コイルに流れる永久電流により磁界エネルギーの形で電気エネルギーが貯えられる。サイリスタ変換器により電力系統と接続すれば、高効率と速応性のゆえに揚水発電所にとってかわるというのがエネルギー貯蔵の原理である。またプラズマ閉じ込め形核融合炉においても巨大な超電導コイルが使われるから、そこに貯蔵されるエネルギーの取り扱いのためにもこれは避けて通れない技術である。

一期一会といわれるが、増田先生との出会いは数年前の低温工学研究会懇親会場であった。理学部ご出身で故川辺和夫先生の大以来の親友でもあり、お互に意氣投合して協同研究が始まった。それからまたまこの研究の世界のパイオニアであるウイスコンシン大学のブーム教授から、超電導エネルギー貯蔵のぼう大なプロジェクトレポートが送って来られた。畏友岡田東一助教授、山本純也助手と語らって、52年の1年間低温工学会関西支部の輪講会として取り上げてもらった。この縁でブーム教授とも会い国際シンポジウムをやろうではないか、国内会合はすでに2回増田先生が主催されたから第1回の国際会合は阪大のお前らのところでやれと言われたのは53年の2月であった。予想される多くの困難には眼をつぶり、私のヒマラヤに登ろうと決心して始めたのであったが、途中でだめかと思ったことも何度かあった。

それでも成功できたのは、赤堀、岡田両前総長先生、浅田常三郎先生（理学部名誉教授）、西村先生をはじめ工学部の先輩、同僚の諸先生さらに業界でご活躍の諸先輩の暖かいご後援と励ましに支えられたからである。今シンポジウム論文集も印刷に渡す段階になり原稿をめくっていると、数々の水準の高い報告に引き込まれ本当にやっておいてよかったという実感がわいて来る。同時に人と人とのつながりに酌みつくせない妙趣を覚える。

来年7月にはウイスコンシン大学で第2回の会議を行ないこの輪をさらに広げ深めて行けば、意外に早い時期に世界のどこかでエネルギー貯蔵が実現されそうに思え

て来る。またはからずも本年度工学部で発足することになった超電導実験センターでも超電導エネルギー貯蔵は主テーマの一つとなる予定である。

電気工学科助教授 村上吉繁（電気・昭30）記

付記：シンポジウム論文集は本年4月に刊行予定。

購入希望を筆者にお寄せ下さい。

## 電子ビーム研究施設

### 第1回公開学術講座について

エレクトロニクスの進歩に、半導体デバイスの超高速化と超高密度集積化が非常に大きなインパクトを与えていることは周知のことである。このさいデバイス中の信号伝搬状況を観察することが研究上非常に有効であることは言うまでもない。これまで非常に細い針を立て、オシロに接続していたが、集積度が高くなるにつれて技術的に難しくなる。

電子ビーム研究施設では昭和51年度特別設備費、51年度科研費を受け、時間拡大機能を有する電子顕微鏡すなわちストロボ電子顕微鏡の研究に取り組んで来た。すでに時間分解能 1.5ps という世界で最も高性能なストロボ走査電子顕微鏡の開発に成功した。これを用いると、LSI 内部の任意の点での信号波形を容易にとり出せ、集積度が益々増加する LSI の動作解析に非常に有効であるので、国内外から多大の関心が寄せられている。

そこでこれまで蓄積して来たストロボ走査電子顕微鏡とその応用についての理論と実際の詳細を、関心があると思われる第一線の研究者および技術者に公開するために公開学術講座を昭和54年11月28、29日に実施した。初日の9時半～16時20分までは講義、17時50分まで装置の見学（試料台周辺の公開）、2日目は実演を行なった。関西地区から8名（いずれもメーカー）中部地区から2名、東京近郊から21名（公社およびメーカー）計31名の参加があり、熱心な質疑応答があった。終了時に実施したアンケートによると、装置と応用についての概要を伝えるという狙いは成功したように思う。

なお今秋に応用を中心として第2回の公開学術講座を予定している。

電子ビーム研究施設教授 裏 克己（通信・昭28）記

## 大阪大学BME研究会

最近、医学や生物学と工学との境界領域である Bio-Medical Engineering (BME) の分野の研究および技術開発に関心が高まっている。大阪大学では、このような時代の要請を受けて、去る52年7月大阪大学BME研究会を発足させ、以来藤井克彦会長(電気工学科教授)、電気系をはじめ医学部などの若手教官からなる幹事のもとに、10数回の研究集会を開いている。

定例の講演会では、主として学内の研究者の研究報告を行なうが、総合大学の利点を生かして、工学部、医学部はもとより、基礎工学部、理学部、人間科学部、薬学部その他付置研究所等、実に多彩な顔ぶれが多岐にわたる研究の成果を披露している。毎年2月に行なわれるコロキアムは、年間のいわばメインイベントである。午前中は学内におけるBME研究の動向が発表される。午後は学内外を問わず国内第一線にある研究者、技術者、臨床医による招待講演、シンポジウム等が行なわれ、BMEの将来について議論が交わされる。コロキアムも今年で第3回を迎えたが、今年の特色は、全国の企業や病院から多数の聴講者を得た点である。これは、本研究会の研究の動向が、日本の医療技術やME機器産業の今後の発展の方向を示唆している証しである、と当事者一同張り切っている。

本研究会には別段会員資格はなく、BMEに関心のある人ならばだれでも会員になれる。瀧電会々員の方々もお気軽にご入会頂き、本研究会の発展のためにご協力頂きたい。なお、本会の連絡先は下記の通りである。

大阪大学BME研究会事務局

〒565 吹田市山田上

大阪大学工学部電気工学科 藤井研究室内

電話 06-877-5111 内線 4581~3

電気工学科助教授 黒田英三(電気・昭37) 記

## 瀧電会より

### 昭和54年度総会

昨年6月1日夕刻より大阪天満橋マーチャンダイズマークビル内の東天紅において、昭和54年度瀧電会総会が、97名の会員の参加をえて、開催された。鈴木肝副幹事の

司会で議事が進められ、山口次郎会長の挨拶、犬石嘉雄幹事の昭和52・53年度事業・会計報告の後、山口会長より役員交代の提案、趣旨説明があり、満場の拍手のうちに、新たに菅田栄治名誉教授の会長就任が決定された。次いで菅田新会長より新幹事の推薦があり、満場一致で幹事の交代が認められた。裏克己新幹事および中西義郎新幹事より、昭和54年度の事業計画、予算案について説明があり、会報の発刊、瀧電会運動会の復活などの計画が承認され、無事総会を終了した。

引続いて、木下仁志新幹事の司会で懇親の立食パーティに移り、参加者中の最長老藤本治氏(電気・大10)の音頭で乾杯のあと、東天紅自慢の中華料理に舌鼓を打ち、美酒を酌み交わしつつ、暫し時のたつのを忘れ歓談に花を咲かせました。多数参加された長老会員の方よりスピーチを頂き、昔話や旧友の消息など先輩、後輩の隔りなく和気あいあいの内に楽しいひと時を過し、午後8時頃閉会した。

電気工学科助教授 白藤純嗣(電気・昭34) 記

### 昭和55年度瀧電会役員

会長 菅田栄治(電気・昭4,7)

幹事 木下仁志(電気・昭18)

中西義郎(通信・昭27)

裏克己(通信・昭28)

副幹事 黒田英三(電気・昭37)

真田英彦(通信・昭37)

白川 功(電子・昭38)

副会長および顧問は総会で決定の予定。

### 原稿募集

本会報は、当面毎年1回発行する予定にしています。本号は創刊号ですので、掲載記事のほとんどは、幹事が執筆をお願いしたり、準備したものとなりました。第2号(明年5月頃発行予定)からは、会員の皆様からのご寄稿をふんだんに盛り込みまして、内容を一層巾広くかつ充実したものにしたいと思います。奮って原稿をお寄せ下さい。

原稿の内容は、随筆、会員の皆様にお知らせするのが適当と思われるニュース、あるいはクラス会の広報など何でも結構です。本会報は、電気系学科に在学中の学生全員にも配布しますので、若い人に対する励ましのおことばなども結構かと思います。

原稿の長さは、400字詰原稿用紙2枚以内とし、締切

り日は、準備の都合上一応毎年2月末日といたします。原稿には勤務先、役職、卒業学科および卒業年などを明記して頂ければ幸いです。原稿の送り先は下記の通りです。

〒565 吹田市山田上

大阪大学工学部電気系事務室 澄電会宛

### 会計幹事より

1. 53年、54年度会費1120人の方々から納入いただいたおります。澄電会の活動を活発にするためにも今後ともよろしくお願いします。
2. 55年度会費は56年度とともにお願いする予定です。
3. 適当な間隔で名簿を更新してゆくことについて会計面から会費、配布の方法等を検討させられておりますが、この件についてご意見などよせくださいますようお願い申しあげます。

通信工学科教授 中西義郎（通信・昭27）記

### 澄電会東京支部総会

上記が昭和55年4月4日（金）午後6時半より銀座6丁目交説社で開かれた。出席者は三熊支部長ほか100名余り、大阪からは菅田会長、桜井良文教授、山中千代衛教授、裏幹事が出席した。

（裏 克己記）

### クラス委員の変更

電気 昭和6年クラス委員

北島伊佐雄君を佐野隼人君に変更。

### 澄電会会員名簿発刊事業での 悪戦苦闘をふりかえって

51年度の総会で新会則、新組織の承認に続いて、会員名簿発刊事業計画が承認された。しかし、何しろ専属の事務員がいるわけなく、多忙な日常業務のあいまの作業になるので当時の山口会長をはじめ尾崎、犬石、滑川幹事、鈴木、笠原、西原副幹事達が、この事業の膨大な仕事量を予測して戸惑っているうちにあつという間に一年が経ち、結局第1回の会員動静調査書は52年度の総会案内状に同封することになってしまった。その回収率は低く、2割強。そこで同年8月に未返答者に再度督促

状送付。回収された調査書と工業会名簿をもとに、名簿原稿の作成に着手。約3800名の会員のクラス別名簿を整理し、かつ、そこから勤務先別にひろっていくのは非常に精根のいる作業であった。これには電気系事務の方が協力してくれた。53年も明けたころ、ようやく原稿ができあがり、印刷屋に渡し、写植をはじめてもらった。このまま順調にいけば4月には完成、配布、5月に総会という予定であった。

残念ながら、基礎データが不正確だったこともあって、勤務先別名簿の内容が極めて不十分であることが、初校の段階で判った。そこで、総会を延期してもできるだけ正確な名簿を、ということで再調査することになった。まず、一勤務先に10人以上の卒業生のいる勤務先約60を選び、そこの卒業生にリスト作りを依頼した。大会社では電子計算機がリストをタイプアウトしてくれるが、「名前が全部片仮名なのでそちらで漢字におしてくれ」とか、「基礎工学部と混っているからそちらで選別してくれ」など注文がついてきたものもあった。残りの勤務先別リストについては、1人1人当らざるを得なかった。この作業は53年の7、8月に一人のアルバイト嬢にたのんだが、これまた面倒な作業であり、おまけに「この人は○○会社に向いているのですが、どちらの所属にしておきましょうか」にはじまる質問にいちいち対応せねばならず、夏休み中の多くの時間がつぶれてしまった。ようやく9月に原稿完成。クラス別名簿は約80人のクラス委員に2回校正していただいたが、その事務も大変だった。「旧教官」名簿も人事掛で調べたり、昔の先生の記憶にたよったりして作った。

年内完成を目標にピッチをあげた。いよいよ12月の初め印刷完了のころ、印刷所隣りの火事で折角印刷したものが3分の1消火放水で濡れてしまうという思わぬ災難のおまけまでついた。完成は53年12月10日であった。まさに悪戦苦闘の忍耐の2年間であった。内容の正確さは95%以上（当時）だと思っている。多くの方のご協力に感謝する次第である。

電子工学科助教授 西原 浩（通信・昭35）記

### 阪大・京大電気関係教室スポーツ大会

毎年秋に行われていた恒例の阪大・京大電気関係教室の交歓スポーツ大会が昭和54年度から夏に行われることになり、7月7日に当番校の京都大学で開催されました。本学から80名余りの教官、学生がバス2台に分乗して京都に乗り込みましたが、戦績は次の通りでした。

軟式野球 阪大 1—5 京大

ソフトボール 阪大 14—9 京大

テニス 阪大 5-4 京大  
バレー ボール 阪大 1-2 京大  
卓球 阪大 1-2 京大

毎年湯電会からこのスポーツ大会にいくらか援助致しておりますが、今回は4万円寄附致しました。本年度も7月の初旬に当番校の阪大で行われる予定です。

(白川 功記)

### 湯電ゴルフ同好会

湯電会員の親睦をスポーツを通じて行っている行事として、ゴルフ同好会がある。当初竹内信雄氏（伸和エンジニアリング取締役社長、昭和25年通信卒）らの提唱により、住友電気工業㈱、三菱電機㈱等の本会会員の協賛を得て始められた。毎年2~3回の頻度で開催され、本年4月12日（土）に第54回を数えることになった。毎回好プレー、珍プレーが続出し、会員の親睦の目的を十分果しているといえる。最近は、近畿日本鉄道㈱の肝いりで、毎回名門コース「奈良国際ゴルフクラブ」で技を競っている。本同好会参加者の技術レベルは、決して低くなく、激烈な優勝争いが繰り広げられているが、競技終了後はゴルフ談義を肴にビールを傾けるのが楽しみである。かつては大阪大学工業会誌に競技成績を掲載したことでもあったが、諸般の都合？で現在は中止されている。そのためPR不足の面もあるが、本会報を機会に、われと思わん名人の御参加を期待している。

（次回は10月11日の予定）

電気工学科教授 藤井克彦（電気・昭28）記

### クラスだより

### 昭和35年通信工学科卒業20周年記念同窓会ご案内

日時 昭和55年7月5日（土）、6日（日）ごろ予定  
場所 大阪近辺  
(大阪大学工学部見学後、宝塚へ)  
詳細は追ってご通知いたしますので、よろしく心積り下さいますようお願いいたします。

(クラス委員：大村、西原、保田記)

### 編集後記

昨秋の湯電会役員会で、副幹事が会報の編集をすることに決まりました。以来真田君、白川君、それに私の3人でいくたびかの打合せの上、手さぐりで作ったのが、この創刊号です。編集に際し最も苦慮したことは、副幹事はいずれも学内の人間ですので、会員の方々がどんな内容の会報を期待しておられるのか、十分把握できなかった点です。したがって、本号はまだまだ試作品の域を越えるものではないと考えております。今後会報を一層充実させ、皆様のご期待にそえるものとするため、本号について忌憚のないご意見、ご批評をお寄せ下さいまますようお願い申し上げます。

最後に、本号のために快く寄稿して頂きました方々、および編集に関し有益なご教示を頂きました幹事の先生方に、厚くお礼申し上げます。

(黒田英三記)